

「ポピュリズム政治（学）の系譜」

吉田 徹

yoshidat@juris.hokudai.ac.jp

「くり返すこのポリリズム／あの衝動はまるで恋だね／くり返すいつかみたいな／あの光景が甦るの」 Perfume 『ポリリズム』（2007）

0.はじめに

■ 「ポピュリズムの時代？」

日本（首長中心）：青島、田中（真）、小泉、石原、河村、橋下等々（知事中心）

欧州（変容）：いわゆる「新右翼」から「ナショナル・ポピュリズム」へ

アメリカ（本場）：ティー・パーティー

ラ米（伝統）：独自性

■ 概念／用語法の混乱、定義の困難

「大衆迎合」「バラマキ政治」「扇動政治」（渡辺 2012；前原 2012）

米：肯定的含意、日欧：否定的含意

⇒Buzz-word としてのポピュリズム←→Anything-Goes としてのポピュリズム・・・中には新右翼との同一視も

⇒本報告の課題：「Defining the Undefinable」（Mudde 2004:542）近年の学術研究の開始：Taggart 2000；高橋・石田 2013；島田・木村編 2009・・・それなりの理由あり、現代政治学の「レンズ」（Gerring 2001）への問いかけ

1.ポピュリズム研究の系譜

〔第1世代－歴史的視点〕

■ Ionescu&Gellner (1969)を嚆矢とする「世界をポピュリズムという亡霊が徘徊している」

問題提起：イデオロギーか政治運動か、歴史的・地理的な再起性の有無、政治的心理への注目、「否定主義」（negationism）という共通性、「人民（people）」の掲揚、より強力なイデオロギーへの吸収

⇒北米、ラ米、ロシア等の実証および概念検証：何れも演繹的というよりは帰納的

⇒ロマン主義、人民党、ナロードニキ運動、マオイズム、ニエレレ、ブジャード主義、マッカーシズム等々：工業化に伴う都市－周辺、資本－農民・労働の対立が基本的視点

■ Government & Opposition 誌ポピュリズム特集（1968）

⇒バーリン、ホーフスタッター、A.トゥーレーヌ、L.シャピロ等々

⇒時に対立的な議論：知識人の役割、アイコンの有無、地域的な偏在性、マルクス主義との関係、既存の社会運動との異同

⇒体系的な定義なし「普遍的でないように思うものの、ポピュリズムの特性は工業化と資本主義の恐怖を回避するための社会的・経済的綱領の擁護にあり（略）西欧世界で生じている恐怖をいかに避けるかということについての暗い理論である」（Isaiah Berlin [178]）。

- …両研究ともに①既存の地域研究・運動史・精神史の「応用」によるポピュリズムへのアプローチ、②「近代」「ゲマインシャフト」「工業化」の離脱過程としてポピュリズムを把握、③同時代の政治運動を「ポピュリズム」として片付ける傾向

#### [第二世代—精緻化]

##### ■ Canovan (1981)：解釈枠組みと類型化の模索

「農民ポピュリズム」：①農民ラディカリズム（人民党）、②小作農運動（東欧農民一揆）、③知識人／農本社会主義（ナロードニキ）

「政治的ポピュリズム」：①ポピュリスト独裁（ペロン）、②ポピュリスト民主主義（レフェンダム／直接民主制）、③反動的ポピュリズム（Gウォレス）、④政治家ポピュリズム（カーター等）

⇒Wiles (1969) の定義（共通項）を踏襲：道徳性、リーダー重視、（短期的な）運動体、反知性主義、反エリート主義

→「反自由主義」からの投射（Canovan 1999）

→「人民」概念の多様性からの強調（Canovan 2005）

『「人民」なる概念、正確に言って人民概念と関連付けられるアイディアや言説を取り扱うのが困難なのは確かであって、現代政治でこれがもっと困難になっているのは確かである』（2005:141）

##### ■ Telos 誌 no.103 ポピュリズム特集（1995）

⇒ポスト冷戦期のポピュリズム：「ニューポリティックス」との関係性の精査（エコロジー運動、「ブラック・ポピュリズム」等）

- …①ポピュリズムの「不変性」についての合意、②民主主義（理）論への接続の必要性、③政治社会の変動との因果関係の推定

#### [第三世代—理論化]

##### ■ Ernest Laclau (2005)

⇒ポスト・マルクス主義の視座からヘゲモニー戦略としてのポピュリズム論（cf.ラクラウ&ムフ2012）：「ヘテロ」の構成論理としての「空虚なシニフィアン」

⇒「闘技民主主義」との接近（Mouffe 2005）

⇒「人民主権論における人民」と「ポピュリズムにおける人民」のズレの自己言及としてのポピュリズム（鶴飼 2013）

- …「民主主義の鏡」（Pannizza 2005）としてポピュリズムを捉える視角

##### ■ Mudde (2007) ; Kitchelt (1997) 「急進右翼＝ネオ・ポピュリズム」台頭の背景説明

⇒90年代以降の西欧（ポスト・ファシズム）極右政党とポピュリズムをほぼ同一視：既存政党の

- 中道化・グローバル化・メディア政治・代議制民主主義の機能不全などが説明要因
- ⇒「経済リベラル×権威主義」という「勝利の方程式」(Kitchelt 1997) (『ニッチ政党』)
- 極右政党をポピュリスト政党として解釈(「ナショナル・ポピュリズム」 Taguieff 2002)
- ・・・後期近代における「近代化の敗者」の主たる支持(≈ポピュリズム)
- 一方で類型化・パターン化の試みの継続(e.g. Hermet 2001; Barr 2009)
- 政策ポジション/閾値の研究(e.g. 古賀 2009; Norris 2005)
- (おおよその)合意: ①反エリート、②反知性主義、③「普通の人々(common man)」の掲揚、④アウトサイダー戦略、⑤道徳主義的価値
- ⇒Schmitter 2007: ①既存の政治的対立軸に還元されない、②硬直した政治システムの流動性付加、③「敵」の産出による動員、④有権者の政治化

### 3. 現代民主主義の投射方法としてのポピュリズム

- 戦後民主主義の変容とのセット(Taggart 1997; Reynie 2011; 野田 2013)
- ⇒「戦後合意」の棄却(Taggart 1995)、「戦後遺産の喪失の恐怖」(Reynie 2011)、「デモクラシーの鬼子」(野田 2013)
- ⇒問題意識: ポピュリズム台頭は現在の民主主義の構造的な変容のサイン?  
「ポピュリズムは代表民主政治の特徴である」(Taggart 2004:269)
- ⇒「ポピュリズムによる代表民主制の危機」ではなく、「代表民主制の危機ゆえのポピュリズム」生起という観点
- 「ポピュリズムの実践は民衆の幼稚さを増幅し、さらに不寛容まで広がるかもしれない。しかし、ポピュリズムの存在は民主主義の本質や約束について何か重要なことを思い出させる」(ストーカー 2006=2013: 197)
- 含意: 歴史的にみても既存の利益媒介構造が揺らぐ際に発生
- 19世紀末: ナロードニキ運動、米人民党
- 1970年代: 新左翼+新右翼
- 2000年代: ナショナル・ポピュリズム+左派ポピュリズム?
- ⇒「代表性(representative)」の問題へ cf. マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18日』
- 『人々』は境界、制度、体制、政策の正当性の源泉となるゆえに、あらゆる団体や集団こそが自らが『人々』であり、あるいはその名において存在すると主張するインセンティブを持つ。それゆえ、そのような言説が曖昧かつ馴染みあるものであるのは当然である。人々の声であるとする一体的あるいは雑多な動きは概念の意味合いを混乱に貶める。しかしこれは近代民主政治が誕生する以前からあった過程なのである」(Canovan 2005:1-2)
- 「風景(landscape)」としての代表民主制(Ankersmit 2002)

#### ■政治科学への問い: 情念のポリティクス?

「感情の共鳴はどちらか言えば非組織的に生じるが、人々の感情が(しばしば意図的に)組織化

され、動員される政治現象としてポピュリズムがある」(斉藤 2012 : 192)

「それは彼が自らに異常な力を感じるからである。この力は彼を溢れてその埒外に拡充しようとする。彼は説きには彼を超越したしかも彼はその解釈者に過ぎない道徳的威力に支配されているという感銘を受ける (略) 彼が引き起こす情熱的なエネルギーは彼に反響して彼の活力を高める。もはや話すのは単なる個人ではなくて、それは化身し人格化した集団である」(デュルケム 1912=2005 : 380)

→人は「手段-目的連関」に基づく「理性/利益」でもって (のみ) 政治に関わるのか

cf. 「マニフェスト」「ヴォートマッチ」

「社会制度や政治体制の仕組みを説明する基盤として [社会科学の——引用者註] の工具箱がほとんどいつも前提にするのは、手段/目的の合理性というモデル」(ヴィラ 1999=2004 : 19)

「集計民主主義」=「利益」/「熟議民主主義」=「理性」

←「政治」は手段/目的連関が常に曖昧もしくは問い直される過程

⇒「政治とは社会の非合理的な基礎が露呈する過程である」(Lasswell 1930:184)

「あらゆる価値信仰は、還元されることのない意味されないもの、意味され得ないものがなければ成り立たず、これがあって初めてある合理性の形態が出てくる」(Braud 1996:170)

→「政治リンケージ」の様式:「カリスマ」、「綱領」、「恩顧主義」(Kitchelt 2011)

cf. 「買収」「強制」「説得」(京極 1986)

→シンボル政治・レトリック政治の等閑視? (cf.エーデルマン 1988=2013; 1985=1989)

⇒「落とし所」はみえているけれど:近接分野からの問いかけ (e.g 『動物化』『中動態』のテーゼ) をいかに政治学に取り込んでいくのか

「政治は様々なインタレストによって動機付けられる。その中で誰のどのインタレストをパブリックなものとして理屈付ける (正統化する) か、ある特殊な利害関心を成就させるために、どのような理由と結びつけ、いかなる手段で実現しようとするのか。それこそが政治における討議の焦点である (略) 個々の主体にとって反省性は確保されるべきだが、素朴な情念も必ずしも排除されるべきではない。特定の基準によって望ましい情念と望ましくない情念と分ける考え方は、情念そのもの適理性 (reasonability) を問題にできると考える誤りを犯しているだけでなく、政治における脱-自由化 (de-liberation) の可能性を狭めている。それは、人々にとって政治が持ちうる可能性的な価値を損ねることである」(松尾 2012 : 90-91)

⇒ポピュリズム + サブ政治、新しい・新しい社会運動等への射程

#### ■ 残されている課題

- ・「リーダー」の介在の有無
- ・「持続性」の問題
- ・「批判の論理」ではないポピュリズム?
- ・政治における「磁場」の特定 (神島二郎)

【参考文献】

- Ankersmit,F.R.(2002)"On the Origin,Nature and Future of Representative Democracy," in Do,*Political Representation*, Stanford:Stanford University Press.
- Barr,Robert,B.(2009) Populists, Outsiders and Anti-Establishment Politics,in *Party Politics*,vol.19,no.3.
- Braud,Philippe(1996) *L'Emotion en Politique*, Paris:Presses de Sciences Po.
- Laclau,Ernesto (2005) *On Populist Reason*,London:Verso.
- Telos(1995) *Special Issue on Populism I*,no.103, Spring.
- Canovan,Margaret(1981) *Populism*, London:Junction Books
- (1999)"Trust the People: Populism and Two Faces of Democracy," in *Political Studies*,vol.47.
- (2005) *People*, London:Polity Press.
- Gouvernement and Opposition (1967) *Populism*, vol.3,no.2
- Gerring,John (2001) *Social Science Methodology*,Cambridge University Press.
- Hermet,Guy(2001), *Les Populismes dans le Monde*, Paris :Fayard.
- Kitchelt,Herbert (1997) *The Radical Right in Western Europe*,Ann Arbor:University of Michigan Press.
- (2011) "Do Institutions Matter for Parties' Electoral Linkage Strategies?", Paper prepared for Delivery at the Annual Meeting of the American Political Science Association in Seattle.
- Lasswell,Harold,D. (1930) *Psychopathology and Politics*,The University of Chicago Press.
- Mouffe,Chantal (2005),*The End of Politics and the Challenge of Right-wing Populism*, in Pannizza(ed.).
- Réynie,Dominique (2010) *Populisme.La Pente Fatale*, Paris : Fayard.
- Norris,Pippa(2005) *Radical Right : Voters and Parties in the Electoral Market*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmitter,Philippe,C.(2007)"A Balance Sheet of the Vices and Virtues of 'Populisms'," in *Romanian Journal of Political Science*, January.
- Taggart,Paul(1995)" New Populist Parties in Western Europe," in *West European Politics*, vol.18,no.1.
- (2000) *Populism*,Buckingham:Open University Press.
- (2004) "Populism and Representative Politics in Contemporary Europe," in *Journal of Political Ideologies*,vol.9,no.3.
- Taguieff, Pierre-Andre(2002),*L'Illusion populiste : de l'archaïque au médiatique*, Paris, Berg International.
- Wiles,Peter (1969),"A Sydrome, Not a Doctrine," in Ionescu and Gellner.
- Panizza, Francisco (2005) "Introduction: Populism and the Mirror of Democracy" in Do.(ed). *Populism and the Mirror of Democracy*,Lodon:Verso.
- ヴィラ、デーナ＝リチャード (1999＝2004) 『政治・哲学・恐怖』(伊藤・磯山訳) 法政大学出版 局
- エーデルマン、マーレー (1988＝2013) 『政治スペクタクルの構築』(法貴良一訳) 青弓社
- (1985＝1989) 『政治の象徴作用』(法貴良一訳) 中央大学出版部
- 鵜飼健史 (2013) 『人民主権について』 法政大学出版局 (近刊)

- 神島二郎 (1982) 『磁場の政治学』 岩波書店
- 京極純一 (1986) 『日本人と政治』 東京大学出版会
- ストーカー、ジェリー (2006=2013) 『政治をあきらめない理由』 (山口二郎訳) 岩波書店
- 高橋進・石田徹編 (2013) 『ポピュリズム時代のデモクラシー』 法律文化社
- デュルケム、エミール (1912=2005) 『宗教生活の原初的形態』 (古野清人訳) 岩波文庫
- 古賀光生 (2009) 「脱-クライエンテリズム期における選挙市場の比較分析」 日本政治学会編『政治と暴力—年報政治学 2009 年 II』
- 斉藤純一 (2012) 「デモクラシーにおける理性と感情」 斉藤・田村編『アクセス・デモクラシー論』 日本経済評論社
- 島田幸典・木村幹編 (2009) 『ポピュリズム・民主主義・政治指導』 ミネルヴァ書房
- 前原誠司 (2012) 『政権交代の試練』 新潮社
- 松尾隆祐 (2012) 「理性・情念・利害——政治の掛け金について」 『法政大学大学院紀要』 第 69 号
- 渡辺恒雄 (2012) 『ポピュリズム批判』 新潮新書
- 吉田 徹 (2011) 『ポピュリズムを考える』 NHK ブックス
- (2012) 「いかに共同性を創造するか」 『世界』 7 月号
- ラクラウ、エルネスト/シャンタル・ムフ (2011) 『民主主義の革命』 (西永・千葉訳) 筑摩書房
- 野田昌吾 (2013) 「デモクラシーの現在とポピュリズム」 高橋進・石田徹編所収